

# 震災後のアマモ場とそこに棲む稚魚たち ～藻場の回復と今後の資源増殖～

岩手県宮古湾の奥には、アマモという海草が生育している藻場があり、様々な稚魚が育つ「海のゆりかご」でした。しかし、東日本大震災で発生した津波は、宮古湾の地形を変化させるほどの大きな影響を与えました。海のゆりかごは、津波後どうなっているのか・・・？私達は2011年6月から湾内のアマモと、そこに棲む稚魚の調査を開始し、震災前の2010年6月のデータと比較しました。

震災後の2011年6月のアマモの密度は、震災前の30%程度にまで減少していましたが、2012年6月以降増加に転じ、回復の傾向が見られています（図1）。

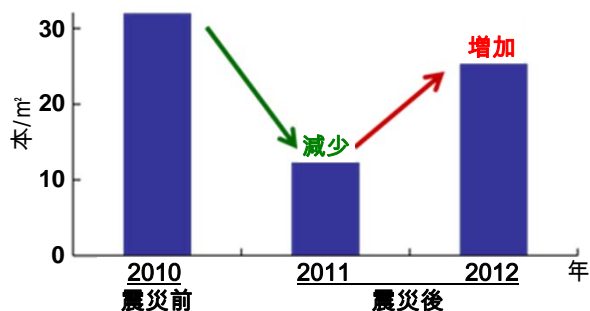


図1 各年6月のアマモの分布密度

一時減少したアマモが順調に増加していることは、光や水質など、アマモが育つ条件が残っており、海の中でも震災からの回復が進んでいる証拠と考えられます（写真左）。

2012年7月には、種子を付けたアマモが多く観察され、これからの藻場の復活の加速に期待が持てそうです（写真右）。

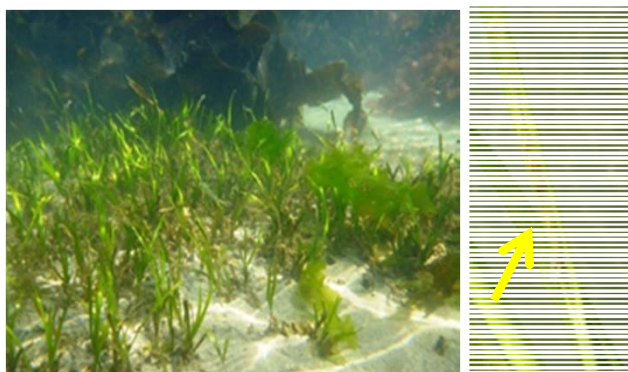


写真 震災後の宮古湾内のアマモ場（左）と種子（右）

並行して、地曳網を用いて稚魚調査を行い、震災前後のアマモ場周辺の稚魚の生息密度を比較した結果、震災直後に大幅に減少していましたが、約1年後の2012年6月には回復傾向が見られました（図2）。

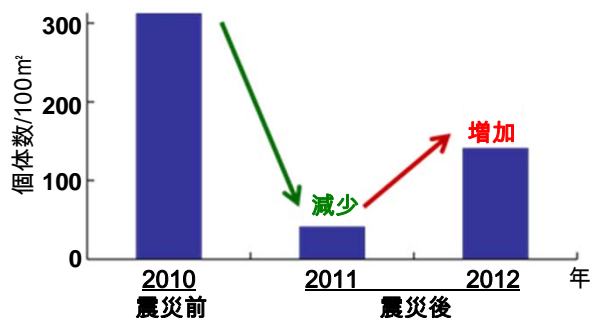


図2 各年6月の稚魚の生息密度

このことから、藻場の回復に伴い、餌や隠れ家など、湾内の環境が稚魚の育成に適した状態に戻ってきていると考えられます。

沿岸漁業の復興を加速させるには、種苗放流も含めた増殖手法や資源管理の方法を積極的に活用し、水産資源の増大を図る必要があります。一方その際は、震災後の回復過程にある沿岸環境を十分に把握し、増えてきた藻場の稚魚たちと放流種苗が競合しないよう、注意を払うことも必要です。今後は、震災後の海洋環境の変化を捉えながら、それに応じた増殖技術の開発を進め、震災からの復興に繋げて行きたいと考えています。

（資源増殖グループ研究員 野田勉）



この研究に取り組んでいる資源増殖グループの、大河内裕之グループ長、清水大輔研究員、長倉義智主任研究員（後列左から）、野田勉研究員、藤浪祐一郎主任研究員（前列左から）